

土壤医検定試験 1 級合格体験記

山田 康平*

1 はじめに

私は、福島県庁に務める県職員で、土壤医検定試験を受験した当時は、県西部の会津地方で農業の普及指導員の仕事をしていました。当時、私は水稻を中心に、畑作物やエゴマやカボチャなどの地域特産物の生産振興を担当しており、農家の方をまわって栽培指導を行ったり、栽培指導会を開催したりと、農家のみなさんを相手に様々な普及活動をしていました。

あるとき、地区の老人クラブからの依頼で、家庭菜園向けの野菜づくり勉強会を開催した際、土壤診断してあげたら喜んでもらえるかな？と考え、「畑の土を一握り持ってきてください。」と事前をお願いしておき、土壤診断項目の中でも最も重要で簡単に測定できる「pH」と「EC」をその場で測定し、その結果に基づいて、作付前に投入する石灰や肥料の量の考え方を話したところ、大変好評いただきました。やはり、土壤や肥料の知識は、作物を育てる上で基本であり、私たち普及指導員にとっても欠かせない技術だと再確認しました。

土壤医検定試験については、私は大学時代に土壤学を専攻していたこともあり、自分自

身のスキルアップと腕試しのために受験しました。試験開始年度の2013年に2級を受検し、大学院生時代と普及員時代をあわせて5年の経験を経た2015年に1級を受検しました。試験終了時は、半分くらいしか自信を持った解答ができなかった感覚がありましたが、なんとか合格していました。

今回、合格体験記の寄稿のお話をいただき、参考になるかわかりませんが、私なりに自分が実施した試験対策の内容や、受験してみてポイントとすべき点について記載してみたいと思います。

2 試験対策

試験対策としては、日本土壤協会が発行している土壤医検定1級の参考書「土壤診断と対策」の内容を完璧に理解できれば、まず合格できると思います。逆に、この参考書



* 福島県農林水産部、土壤医

に載っていない内容は、ほとんど試験に出なかったと思います。そのため、この参考書を熟読する、というのが最良の学習方法になります。

1級の試験の内容としては、2級までのマークシート方式4者択一のものに加えて、記述式の問題と業績レポートが加わります。それぞれについて、内容と対策のポイントとなった点について下記に記します。

(1) マークシート式問題（配点50点/100点満点中）

問題の内容は、4つの中から、正しい記述または誤った記述をしているものを一つ選ぶような問題です。勉強する際に、注意すべき点は、数値的な部分まである程度把握することです。例えば、ある必須元素が不足すると、それに伴って植物にはこんな欠乏症状がでる、という内容のみならず、おおよそ〇〇mg/100g以下になると欠乏症状が出始める、といったおおよその数値的な部分も頭に入れておくとよいと思います。こういう部分が正誤に関わる問題も結構ありましたので、参考書を読み進めるなかで一步踏み込んだ理解が必要です。

(2) 記述式の問題（配点25点/100点満点中）

記述式といっても、私の受験時の問題では、数百字書くような長文のものではなく、ほぼ文章1行か単語を答えるような問題が、5～6問程度だったと思います。内容としては、〇〇という資材を使う上で注意する点を3つあげよ、といったものや、××な症状を引き起こす原因として考えられるものを4つあげよ、といった複数個解答を求めるものが多かったと感じました。そのため、作物生産におけるある問題に対し、様々な角度からアプローチするような応用力や現場での対応力が試されます。土壌の化学性、物理性、生物



性など、参考書では各論的に記載されていますが、横断的に理解する必要があります。

(3) 業績レポート（配点25点/100点満点中）

業績レポートは、①土づくり指導、②土づくりに関する調査・研究、③土づくりの実践の3つから1つを選んで、これまでに自分が行ってきた業績についてレポートを書くもので、事前に作成して試験当日持参します。

私は①土づくり指導を選択し、東日本大震災にかかる水稻栽培の放射性物質対策に関する内容を記載しました。震災後、福島県の県北地方で水稻担当をしていた頃に、水田へのカリウム肥料の施用量を決める上で参考にするため数百点の土壌をサンプリングして交換性カリウムを測定し、地域ごとにカリウムの必要量を算出した取組について記載しました。

業績レポートをまとめるうえで注意した点は、一つ目として「問われていることに対して素直に記述する」ということです。受験案内には、上記①～③のうち1つを選んで、「指導の実施期間、指導内容、主な成果内容、成果が得られた要因について、800字以内で記載すること」とありました。私は①の土づくり指導を選び、書き方としては、(1)指導の実施期間、(2)指導内容、(3)主な成果内容、(4)成果が得られた要因、といったように項目を

立て、どのような背景があってどのような指導をし、どのような成果が生まれたのか、というような流れがきちんとわかるように注意しました。

二つ目としては、実施した取組が読んでいる人（採点者）によくわかるように工夫することです。「〇〇人の方に××回指導し、収量△△kgという成果が得られた」といったように具体的な数値を用いて表したり、参考資料の添付が認められているので、内容が読み取れるようなデータや写真等を添付したりと、読む人に自分の取組が見えるよう工夫するとよいと思います。

3 最後に

土壌の知識は農業技術の基本であり、特に、私たち普及指導員にとっては、指導手法としての引き出しを多くしてくれる大きな武器になります。土壌医検定は、私たちが普段から磨くべき土壌の知識や技術について、ど

の程度身につけているのか自分の力を試すのに大変良い場だと思います。試験勉強を通じて、学生時代に学んだ土壌学の基礎的な部分を振り返るきっかけになりましたし、参考書は応用的な内容が多く、現場の指導に生かせる新たな情報を多く得られました。普段の業務の中で、土壌の知識について一から体系的に学ぶ機会は意外と多くありませんし、仕事が忙しい中で、何か明確な目標がないと勉強する気になりませんので、土壌医検定1級合格を一つの動機として、土壌の勉強をしてみるのもよいと思います。

私自身、1級合格したことで自信になりましたし、この資格を取得しただけでは意味がないので、効果的な普及指導活動を展開するための自分の武器として様々な場面で活用していきたいと思います。そして、少しでも福島県の農業の振興、農家のみなさんの経営改善にお役に立てればと思います。